



運命の恋

6月9日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

6月9日のおはなし「運命の恋」

ふらふら歩いていると、危ないよと声をかけられた。

「危なかねえよ」

「危ないですよ、気をつけないと、ほら」

「おっと！」

車がこっちの身体のすれすれのところを走って行きやがった。

「ほらね。酔っぱらってるんだから気をつけないと」

「酔っぱらってるだと？ 誰が」

「誰がって」

「どこの誰が」

「あなたですよ」

「冗談言っちゃいけねえ」

そこで初めて気がついたが、声をかけて来たのは女で、しかもラテンな感じのすこぶるつきの美女だった。

「さっきから見ていたら危なっかしくて」

「冗談言っちゃいけねえ。おいらね、酔ってなんかいませんよ？ これっぽっちもね！」

「酔ってる人はそう言うんですよ」

「酔ってる人はそう言う！ おっしゃる通り！ でもね。じゃあね。聞きますがね。酔ってない人は、これっぽっちも酔ってないって言っちゃいけないんですかってんだべらぼうめ」

「日本語でもいいんですけど」

「なにを？」

「無理にスペイン語をしゃべってくれなくても大丈夫ですよ」

「スペイン語なあ？ おれはスペイン語なんて知らないよ」

「だって喋ってるじゃないですか、いま」

「喋ってねえよ」

「喋ってますって、いまのほら、それだって」

「どれ」

と言ってきよろきよろしていると笑われた。

「どれじゃなくて、いまあなたが喋ってるのはスペイン語じゃないですか」

「なにが？」

「あれれ。あなた自分が何語を喋っていると思ってます？」

「日本語だよ。日本人だもん」

「おやおや」

女は外人がよくやるように目玉をぐるっと天に向けて呆れたというような表情をするがそれがまた見たこともないくらい綺麗だ。こんな美人と話ができるのなら何語で喋っていたって構わない。

「メキシコかどこかで暮らしていたことがあるんですか？」

「誰が」

「だからあなたが」

「どうして」

「いえ。どうしてって、だってスペイン語、お上手だし、どこの訛りかって言うとわたしの母国のメキシコの訛りに近いし」

「あんたの国の言葉で喋ってるの？ おいらが？」

「はい」

「でもだったらメキシコ語じゃないの？」

「まあそうなんですけど、メキシコではスペイン語が使われているんですよ」

「そうなの？ 誰が決めたの？」

「特に誰というのでなく、歴史的に」

「じゃおいら、あんたと、こんなメキシコの別嬪さんと、スペイン語で話してるの？」

「はい」

「それ、すごくね？」

「はあ、まあ」

「だっておいら知らないんだよ？ メキシコ語もスペイン語もメキシコ語がスペイン語だってことも」

「不思議なことです」

「なんで？」

「なんでって聞かれても」

「運命かな」

「はい？」

「これは神様が、おいらとあんたを引き合わせるために」

「ええ？」

困ったような顔をする女の表情がまたそそる。もういい。いくところまでいこう。犯罪者になっただけいい。

「おいらね、お嬢さん」

「お、お嬢さん？」

「その目に惚れた」

「な、なに？」

「その瞳に乾杯だ！」

おれは茶袋に入れたテキーラをあおった。

「やっぱり飲んでるじゃないですか」

「おいらはあんたを待ち続けていたんだ」

「ちょっと、困ります！」

「チューしよ、チュー」

「やめてください」

「あんたが好きだー！」

抱きつこうとしたその瞬間、おれと彼女の間に誰かが割って入った。

「ちょと待ちなさい、そこの男」

いきなり現れたのは小柄な男だった。

「ホセ！」

女が叫んだ。

「さきからおまえ聞てたら勝手なこと言うばかり！」

ホセが片言の日本語で言う。

「るせい！ おいら運命の女と出会ったんだ」

「ウメイのオナ？」

「そうだ。運命の女。運命の恋だ」

「どして。どして思うか」

「だってよ。おいら、聞いたこともねえメキシコのスペイン語ってのも喋り始めたんだ。その人と喋るために神様が授けてくれたんだ」

「バカな人のことですかおまえ」

「んだとコラ！」

「おまえしゃべてる全部日本語さきから」

「ああん？」

「酔ばらてるのことはこちらのマリアの方」

「は？」

「マリア日本語喋てるさきから。日本語ペラペラのことよ」

言ってるそばからラテン美女が膝に手をつくとその場でゲロゲロ戻し始めた。
「この女ベロベロ。吐きに出てきたね。あんた靴汚れてるよ、どくといいい」
あわてておれは飛び退いた。
「ほらマリア、店戻るね」

こうしておれの運命の恋は胃酸の匂いとともにも目の前のメキシコ料理屋に消えてしまった。

「んだよそれ！」
石を蹴ろうとしてふらついて危うく車にはねられそうになった。
「危ないよ」
誰かがおれの手を引いて支えてくれた。
「かたじけねえ。危ねえところだった。ありがとう」
「あら。あなたロシア語上手ね」
そこにはロシア美人が微笑んでいた。

(「日本語でもいいんですけど」 ordered by suzumena-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro
a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

運命の恋

<http://p.booklog.jp/book/40287>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40287>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40287>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.